

(様式3)

5 今年度の重点課題(学校アクションプラン)

令和4年度 富山視覚総合支援学校アクションプラン — 1 —		
重点項目	学習活動	
重点課題	卒業後を見据えた社会体験活動の実施	
現 状	本校には、幼稚園や小学部から在籍し在籍年数の多い視覚障害を有する生徒や、小学校等から不登校のため学校や社会生活の経験の少ない病弱生徒が在籍している。いずれも本校では特別な支援を受けて学校生活を送っているため、支援が当たり前の状態になっている。特別な支援によりできることが増えて自己肯定感が高まるという長所もあるが、配慮され守られて過ごすことが多いため、進学や就職により社会に出た際に、在籍中とのギャップで学業や仕事が続けられなくなったり、再び引きこもったりする生徒が少なくない。 そこで、卒業後の社会生活への橋渡しとなるような活動を考え、事前学習や準備を行ったうえで、校内や校外での社会体験となる活動に取り組み、人との接し方、支援依頼の方法について実践できる力を身に付けられるようにしていきたい。	
達成目標	社会体験活動 年5回以上実施	
方 策	・社会活動実践に向けて必要な知識の習得や実践のための練習や準備を、キャリアや自立活動、総合的な学習／探究の時間、作業学習、生活単元学習等の授業で行う。 ・校内の就業体験や校外の施設等での校外学習を計画し、各自の役割や目標の設定ができるよう支援する。考えられる場面等の練習の設定もする。 ・学習や準備、練習をもとに、自分の役割を行う、人と接する経験をする、支援依頼など臨機応変に行動するなどの実践ができるよう支援する。 ・実践後に、反省点と成長点を挙げて、次回への取組に生かせるようにする。 ・前回の反省や成長をもとに、次の取組に向けて準備や目標を設定できるように支援する。	
これまでの取組状況	・社会体験活動として、視覚グループ、重複グループ、病弱グループの3グループで1回1. 5～2日間を設定し、各グループ2回ずつ合計6回実施した。 ・事前に、キャリア（学校設定教科）や自立活動、総合的な学習／探究の時間、作業学習、生活単元学習等で実践のための準備や練習を行った。 ・1学期の社会体験活動では、点字ブロック啓発活動のためのティッシュ配布、校内就業体験（新聞エコバッグづくり）と余暇活動（買い物）、2学期に計画されている異文化交流に向けた調べ学習、2学期は、校内就業体験（校内清掃、リサイクル製品の作成・配布）、異文化交流を行った。1学期は、生徒同士で話し合って役割を決めて行動したり、外部の人に質問や依頼をしたり、見通しをもって活動したりする姿がみられた。2学期は、事前に準備したり練習したりしたことで、プレゼンテーションをしたり、必要なことを相手に伝えたりすることができた。 ・2学期に実施した1、2年の校外学習では、ある程度の条件を教師が決めた上で、生徒がグループに分かれて、自分たちで行き先や調べてくることを決めて計画し、案内や紹介をしたり、困ったときには協力して解決したりして実行することができた。 ・外部講師による、選挙に関する出前講座、消費生活講座、身だしなみ講座等、卒業後に必要な知識や技能などに関する講座で話を聞いたり体験したりする活動も行った。	
評 価	A	・社会体験活動を3グループで2回ずつ、計6回実施した。 ・学年や実態に応じて、生徒による校外学習の計画・実行、また選挙や消費生活、身だしなみ等に関する外部講師による講座の実施も行った。
学校関係者の意見	・体験の回数だけではなく内容も充実している。体験の振り返りを生徒だけではなく、教員も行っているのがよい。 ・体験を今年度限りにせず、毎年継続する、隔年で行うものを整理するとよい。全学部で同様の取組があるとよい。	
次年度へ向けての課題	・障害による経験不足や理解や判断の難しい生徒の実態から、生徒自身による計画・実行の難しさを感じた。生徒の課題を教員で共通理解し、日頃の授業や今回のような取組で経験を積み重ね、その経験をもとに計画・実行したり、実行するときの人との接し方や支援依頼の方法を身に付けたりできるように支援していきたい。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

令和4年度 富山視覚総合支援学校アクションプラン — 2 —

重点項目	進路指導	
重点課題	高等部卒業学年在籍生徒に対する進路支援	
現 状	本年度の高等部においては、普通科（視覚障害・病弱）及び専攻科（保健医療科・理療科）に在籍する卒業学年の在籍生徒が8名いる。障害の程度や幅広い年齢層、居住する地域性など、それぞれの実態に応じた進路支援がこれまで以上に必要となっている。 また、昨年度の卒業生において、卒業年度内に就職先が決まらなかった例もあったことから、年度当初から、卒業学年生とその保護者の卒業後の進路希望を的確に把握するとともに、これまで本校の得ている情報を基に労働機関や就労支援機関等と連携を図りながら進路決定に結びつけていく必要がある。	
達成目標	高等部卒業学年生徒の進路希望達成率80%以上	
方 策	・年度当初に実施している「進路希望調査」の前に、高等部全卒業学年生徒やその保護者との進路に関する懇談会を設け、一人一人の進路希望状況をより的確に把握する。 ・「令和4年度進路指導マニュアル」の見直しに向けて進路指導部内で検討する機会を設けるとともに、特に進路指導年間計画を中心に各学部、学科において周知する機会を設ける。 ・進路指導年間計画を基に、各学部、学科の実態に応じた就業体験や進路懇話会などを計画的に実施する。 ・「進路等相談希望票」を進路希望調査配布時に併せて配布し、幼児児童生徒や保護者からの進路や福祉等に関する疑問や不安がある場合に対応する機会を設ける。 ・進学希望生徒には、進学希望先の概要、受検までの流れ、受検方法等に関する情報提供を行うとともに、学校説明会等の参加を促す。	
これまでの取組状況	・4月から5月にかけて、高等部卒業学年生徒又はその保護者全員とで、卒業後の進路や就業体験先の希望について、懇談の機会を個別に設け実施した。 ・「進路指導マニュアル」の見直し作業は進路指導部内でワーキングチームを作り、各学部の実態に応じた内容の検討を行った。これまでのところ、進路指導年間計画の見直し作業を重点に概ね完了するところまで取り組むことができた。 ・就業体験実施対象である高等部2・3年生徒11名中9名については2回以上、1名は1回実施した。また1年生3名については、県内の大学や医療、福祉機関等へのオープンキャンパスや施設見学を1回以上実施した。 ・高等部普通科に進学希望の生徒がいることから、大学案内やオープンキャンパス等に関する情報提供を行った。また、外部模試を実施し、生徒の学力を客観的に把握し、今後の進路指導の一助とする機会を設けることができた。	
評 価	B	・1月30日現在、高等部卒業学年生徒7名中6名について、希望進路先への就職及び施設利用に関する内定が受けられる見通しである。
学校関係者の意見	・外部への理解啓発及び、生徒や保護者の意識を高めることとの両輪で取り組んでいるのが良い。 ・進路指導の取組を全学部に伝えたとよい。各種講座については保護者も参加するとよい。	
次年度へ向けての課題	・「進路指導マニュアル」の進路指導年間計画に関わる指導方法について、より具体的に教員間で共通理解が図れるよう、引き続き見直し作業を行っていく必要がある ・在籍する生徒の多様な進路希望や障害の実態に対応する上で、生徒やその保護者との懇談の機会を積極的に行うとともに、校内外の関係者及び関係機関との連携を密に図りながら、適切な進路指導を行っていく必要がある。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

令和4年度 富山視覚総合支援学校アクションプラン — 3 —

重点項目	寄宿舎生活	
重点課題	年齢に応じた寄宿舎の生活指導の在り方について	
現 状	寄宿舎生は、中学部から高等部専攻科までの異年齢の8名が入舎している。これまでの余暇活動では、小学部の生徒がいたこともあり、季節にちなんだ活動を計画し、児童生徒が楽しみ、満足できる活動内容を工夫して行ってきた。しかし、入舎している生徒の年齢が高まったため、将来の生き方を考えるような情報や今後の社会生活を営むために役立つ情報を提供することも必要であると考えた。 そこで、余暇活動に社会性を育む公共の話題を提供したり、寮生ミーティングの在り方を見直したりするなど新たな取組を進め、自立と社会性を育む要素を取り入れ、充実を図ることを目指す。	
達成目標	内閣府政府広報室発行の「明日への声」NHK「バリバラ」等の音声を1か月1回以上目途に放送で流し、情報提供を行う。	日常生活を助ける「便利グッズ」や毎日新聞社発行の「点字毎日」の紹介や活用を学期に2回以上行う。
方 策	・知識を身に付けられる内容を選択する。 ・学習時間終了後に計画的に実施する。 ・聴いた内容について生徒に4段階で評価し、感想を書いてもらうなど振り返り用紙を作成し、生徒の変容を捉える。	・寮生ミーティングで「便利グッズ」を紹介し、日々の生活でも積極的に利用する機会を増やす。 ・「点字毎日」を生徒に貸し出したり、寮生ミーティングで記事を伝えたりする。
これまでの取組状況	・1学期は、内閣府政府広報室発行の「明日への声」の中から、防災やSDGsなどの知識として身に付けられる内容を中心に職員が選択し、5月1回、6月2回、7月1回、情報提供として計4回実施した。2学期は、事前に生徒から聴いてみたい内容を聞き取りし、9月1回、10月2回、11月1回、12月1回、計5回実施した。内容は「明日への声」の他、Webからの引用、NHK「バリバラ」の音声を流した。1か月1回以上実施できた。生徒の振り返りの中には「意識したいと思う」「工夫することが大切」「また聴いてみたい」「知ることができた」という声が聞かれた。 ・5月、6月は、放送での寮生ミーティングの際に便利グッズを紹介し、貸し出しを呼び掛けた。7月からは寮生ミーティングを対面式で行い、会場を各舎室から、多目的ホールに変更した。7月に紹介した頭髪用の「速乾手袋」を二人の生徒に入浴後試してもらった。生徒からは「こんな便利グッズがあるとは知らなかった。知ってよかった」という声が聞かれた。 ・2学期より、談話室に掲示していた便利グッズ一覧表を生徒が活用できるように、青い目立つ紐をつけ、各階の廊下に掲示コーナーを設け掲示した。また、「点字毎日」を拡大コピーし、廊下の掲示コーナーに掲示した。生徒の関心が高まるように工夫したことで、便利グッズ一覧表を部屋に持参して拡大読書器で読んだり、掲示された「点字毎日」の記事に気付いたりする生徒が見られた。	
評 価	A	・内閣府政府広報室発行の「明日への声」、NHK「バリバラ」等の音声を月1回以上を放送で流し、情報提供を行った。また、生活を助ける「便利グッズ」や毎日新聞社発行の「点字毎日」の紹介や活用について学期に2回以上行うことができた。 ・寮生ミーティングで「便利グッズ」を紹介し、拡大コピーした「点字毎日」を舎室前廊下に掲示することで、生徒の関心がより高まり、余暇の充実を図ることができた。
学校関係者の意見	・舎生に聞いてみたい内容を尋ねているのがよい。 ・便利グッズを買いに行くためにはき、どんなところで売っているのかも分かるようにするとよい。	
次年度へ向けての課題	・寄宿舎生徒の年齢構成が変わるときには、実情に応じた余暇活動の内容の選定が必要である。しかし、中学部以上を中心に今後も暮らしや生活に関連のある情報や社会性を育む公共の話題を提供する必要がある。 ・便利グッズや「点字毎日」は、職員が紹介するだけでなく、実際に一緒に使ったり読んだりするなど時間を設けることで利用する生徒がみられるようになった。寮生ミーティングの場だけでなく、生活のいろいろな機会を捉えて今後も継続し啓発していきたい。	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)